

『発達の最近接領域の理論』 ヴィゴツキー(著)土井・神谷(訳)(2003)

VI. 生活的概念と科学的概念の発達

p181 母語・外国語の発達との比較

- ・機能的、心理学的にも、子どもは外国語と母語とをまったく異なる仕方で学習する。
- ・子どもは母語の習得を、名詞の男性と女性を区別することからは始めない。
- ・外国語は、母語とは違った仕方で覚える。
  
- ・科学的概念の習得は、生活的・自然発生的概念の習得とは違っている。
  
- ・外国語の習得が可能になるためには、母語の習得が一定の水準に達していなければならない。
  
- ・日常生活における概念(自然発生的)の発達過程と、学校における子どもの概念(科学的)の発達過程との間には、深い相互関連があり、この関連は両概念の発達が、異なるすじ道を進むからこと可能となる。
  
- ・科学的概念は、子どもの概念の範囲を拡大することも出来る。
- ・それらの差異は、どこにあるかを理解することこそ、したがって、発達の最近接領域を形成しながら、両概念が新しいものをもたらすのはどの点であるのかを理解する事こそが重要。

●皆さんと意見交換したいこと

- ・外国語習得のための、ご自分なりの工夫について。

===

VII. 教育過程の児童学的分析について

p188 児童学的分析とは何か

- ・学校における教育活動の児童学的分析とは何に帰着するのか。大部分は、救急援助の性格をもってい

る。授業を観察、分析し、教育者に対して、助言する。

#### ・児童学的分析の観点

- 1) 発達を教授・学習とは無関係にとらえる(ピアジェ)
- 2) 教授・学習がそのまま発達である(ソーンダイク)
- 3) 教授・学習の後、発達がついてくる(ヴィゴツキー)

・1)では、発達は、教授・学習に先行する

・この観点に立っているのがピアジェ。彼は子供達は11歳になるまで、思考をつまり因果関係の確認を獲得していないので、理科や社会科の教授・学習を提起する事は、11歳までは無益だと考える。

・1)の観点に関して、先進的な欧米の学校の実践に、3つの基本的修正がもたらされた。

(1)子どもの因果関係の発達が弱いのであれば、学校は最大の注意を払い、時間をもっと多く使って、この機能の発達に対して働きかけるべきと考える。

(2)アメリカの研究で生まれた「二重水準理論」

第一は、子どもの「現在の発達水準」、つまり今日すでに成熟した水準。

第二は、子どもの「発達の最近接領域」、つまり今日はまだ成熟していないが、しかし既に成熟の途上であり、既に発芽し、明日になればもう結実し、明日になればもう現在の発達水準に移行するような今後の発達の中にある諸過程のこと。

子どもが今日、何らかの成熟した技能・能力をあらわにするとすれば、未成熟な形であっても、既に発達の進行の中にあって、発達を前に動かす、ある機能が彼には存在すると考える。

・発達の最近接領域の指標となるものは、現在の発達水準と発達の最近接領域との間の「くいちがい」なのである。

・発達の最近接領域の研究から、教授・学習は、現在の発達水準ではなく、発達の最近接領域に適応するものでなければならないという結論が引き出される。

(3)は、1)の観点を完全に根絶。子どもが教えられているか、いないかに依存して、異なるあらわれ方を見逃さない。

・ソーンダイクは、教授・学習とは発達であると主張した。

・ドイツの構造心理学者コフカは、2つの対極的観点の和解をはかっているが、成功していない。

・教授・学習過程を、子どもの発達過程と同一視することは正しくない。

・子どもの発達過程を、教授・学習過程と全く無関係に遂行されると考えることも正しくない。

・学校で、私達が扱うのは二つの異なる過程：発達過程と教授・学習過程。あらゆる問題は、この2つの過程の間の関係にある。

～p197

●皆さんと意見交換したいこと

・「発達の最近接領域」を参考にした J.ブルーナーの「スキヤフォルディング(足場かけ)」に関して、  
いかに、足場を外していくのか、フェーディングの見極めやタイミング、フェーディングの仕方について。

例)新人を指導している OJT トレーナーが、新人の独り立ちを促したい。

- ・スキヤフォルディングしながら、仕事を教え、任せていった時に、
- ・どのタイミングで、
- ・新人がどういう状態になったら(見極め)
- ・足場を外して、新人に任せていくのか
  
- ・その足場の外し方(新人が不安にならないような)
- ・フェーディングの仕方をどうすれば
  
- ・足場外しが上手くいかなかったときの対処法は？

以上